

冬なかりせば

海からの強い風が降り積もった雪を巻き上げて地吹雪のような嵐となって、生徒は防寒着の襟を立て、マフラーをきつく巻いて、毎朝早くに技師さんたちが除雪し確保してくれる桜坂の歩道を、足下を気にしながらのぼっていく。

今年もまた、本荘由利地区は雪が多い。秋田市は積雪60cmを超えて、平年の3倍の積雪量だ。

この19, 20日と3年生は秋田大学でセンター試験を受けた。数学Iと国語が難しかったようで、昨年度比-40点程度が予想されている。本高生はよく健闘し、センター試験でのアドバンテージは得られなかったものの、二次試験勝負に持ち込んだと評価している。いよいよ、これからが諸君の底力が試されるときだ。勝負はこれまで鍛えた学力と人間力だ。

毎年、年が明けるとベートーベンのバイオリンソナタ「スプリング」を聴いている。バイオリンのつややかで朗らかな音が、低く垂れ込めた鉛色の空を突き抜けた雲雀のさえずりのように心地よい。これから冬の底へと降りていくときに、「スプリング」は春への希望を感じさせてくれる。



秋田は四季が美しい。自然は、過酷な冬に自らの生命をつなぎ、来るべき春に向けて花の準備をする。冬を越えてこそ、樹々は一瞬に歓喜を爆発させるように花を咲かす。夏の青葉や焼けつくような太陽の熱も、空気がひんやりと冷気を増し、樹木の葉が色を変える秋も、愛おしさが心に染みる。そのすべてを、冬が通奏低音のように静かに貫いている。この厳しく辛い冬の季節があるからこそ、春の陽は心の底にまで温かさを送り、夏の暑さはむしろありがたく、秋の移ろいは冬支度への共感として感じられる。

冬あればこそ、四季は味わい深く、美しく輝きを増す。冬あればこそ、その只中において、かすかな兆しを敏感に感じ取ることができる。

2月4日の立春は、真冬の只中において、春が立ち上がるのを感じ取る日だ。立春の持つ意味の深さは、北東北に住む者にしか実感としてわからないだろう。厳冬の真っ只中において春を迎えることができるのは、北東北人の鋭敏な感受性とほとぼしる想像力だ。困難の最底辺にいて、事態が微かに好転へ向けて動き出すのを感じ取る力。それを「希望」と名付けたのに違いない。

冬はそのことを教えてくれる。冬なかりせば、春の喜びは失せ、人生の味わいもまた色あせたものになるろう。

3年生諸君よ、本高生よ。今はまだ真冬ではあるが、立春の日はもうすぐやってくる。**The darkest hour is always just before the dawn.** 夜明け前が最も暗い。一番大変だと思って頑張っているときが、克服に一番近づいている時だ。最後まで粘り強く闘って、北東北人の心意気を見せよ。